

文体論の研究

豊田昌倫

BBC (英国放送協会) Radio 4 の人気長寿番組, 'Just a Minute' について調べる必要があったので, 同名の書物, Wess Stafford, *Just a Minute* (2012) を注文した。出版社が Chicago の Moody Publishers と知って少し気になってはいたが, 1967年に始まったこのパネルゲームの秘訣や裏話を期待して到着を待った。ところが, 届いた本の表表紙には, 子どもの顔写真がずらりと並び, 裏表紙には '68 Stories That will Inspire You to Bless a Child's Life' とある。というわけで, BBC のラジオ番組とはまったく無縁の書物を開く羽目になってしまった。

本の注文ではこうした思い込みによるミスマッチは避けられないが, 既知の著者による新刊でも, ときに予測が狂う場合もある。Terry Eagleton, *How to Read Literature* (2013) もその一例である。主著 *Literary Theory: An Introduction* (1983, 1996, 2008) で, phenomenology から psychoanalysis にいたる文学理論を縦横に論じかつ「埋葬」してきた著者が, 新刊でどのような「文学の読み方」を披露するのが注目された。しかし, Eagleton は序文において, 読者は文学理論家, 政治批評家として知られる私の関心が, 本書でどうなったかを知りたいと思うかもしれない, と先手を打ち, 'The answer is that one cannot raise political or theoretical questions about literary texts without a degree of sensitivity to their language.' と告白する。理論武装よりも, まずは「言語への感受性」というのには, いささか驚いた。この転換は「理論の時代」終焉の象徴なのだろうか。

本書は 'Openings', 'Character', 'Narrative', 'Interpretation' および 'Value' の5章で構成される入門書ではあるが, 全方位的な発想に基づく文学的文体論と考えてもよからう。第1章で取り上げられる最初の作品は, E. M. Forster の *A Passage to India*. 著者はその冒頭部を3歩格の韻文のごとく書き直して, 'The tone of the Passage—disenchanted, slightly supercilious, a touch of overbred—is that of a rather snooty guidebook. It sails as close as it dares to suggesting that the city is a literally a heap of garbage.' と説き起こす。実際, 白黒のテキストも Eagleton の手にかかる, ときに鮮やかな光彩をおびて立ち上がってくる。本書によって彼の「言語への感受性」を新たに追体験する過程はスリリングでさえある。

さて, 本年度は2冊の文体論ハンドブックがほぼ同時に英国で出版された。Peter Stockwell & Sara Whiteley (eds.), *The Cambridge Handbook of Stylistics*, 673pp. (Cambridge: Cambridge University Press, 2014) および Michael Burke (ed.), *The*

Routledge Handbook of Stylistics. 540pp. (London & New York: Routledge, 2014) である。前者の ‘Coda: the practice of stylistics’ の中で編者の Stockwell が、文体論は今や ‘interdiscipline’ というよりも ‘discipline’ だと述べているように、文体論に関しても「理論の時代」が一段落して、総合と検証の時代に入ったのだろうか。

Cambridge Handbook は 39 編の寄稿論文が 5 部, ‘The discipline of stylistics’, ‘Literary concepts and stylistics’, ‘Techniques of style’, ‘The contextual experience of style’ および ‘Extensions of stylistics’ に分類され、文体技巧に関する Part III ‘Techniques of style’ には次の 9 編が掲載されている。Manuel Jobert, ‘Phonostylistics and the written text’; Michaela Mahlberg, ‘Grammatical Configuration’; Bill Louw & Marija Milojkovic, ‘Semantic prosody’; Paul Simpson & Patricia Canning, ‘Action and event’; Billy Clark, ‘Pragmatics and inference’; Gerard Steen, ‘Metaphor and style’; Catherine Emmott & Marc Alexander, ‘Foregrounding, burying and plot construction’; Mick Short, ‘Analysing dialogue’; Peter Stockwell, ‘Atmosphere and Tone’.

目新しい用語である ‘phonostylistics’ と ‘burying’ にコメントをつけておこう。まず、前者を書き言葉と関連させる Jobert の論考は、テキストにおける ‘paralinguistic vocal features’ を対象にするもので、*he hesitantly replied* など小説の伝達部を取り上げる。とくに 19 世紀には語り手が介入して人物の ‘vocal peculiarities’ に言及する傾向があった、と指摘する論者は、ケーススタディーとして Edith Wharton の ‘Souls Belated’ を選び、伝達部が ‘interpretative tools’ の役割を十分に果たすと結論づける。しかし、*phonostylistics* の立場からは、発話の様態より登場人物のアクセント、強勢の位置、イントネーションなどの音声特徴にも目を向けたいと思う。

前景(化)と比較すると背景(化)は、研究者の関心をそれほど喚起してはいないが、Emmott & Alexander は ‘burying [an item is placed in the background with the intention that it should not easily found]’ に着目して、ミステリーで最後の謎解きまで埋められている情報の操作を検討する。例に選ばれたのは、Agatha Christie の ‘Murder in the Mews’。小説の書き手は ‘foregrounding’ と ‘burying’ を操りながら読者の興味を繋ぎ止めて、‘surprise ending’ で種明かしをする…。ただ、ミステリーでは、「埋められる」ものにも語りのある時点でライトが当てられ、その残像が読み手の意識の下部で、淡い光を点滅させているのではないか。red herrings も含めてそのあたりの呼吸は、「ミステリーの女王」Christie の独壇場である。

Routledge Handbook に収められた論文は 32 編。‘Historical perspectives in stylistics’, ‘Core issues in stylistics’, ‘Contemporary topics in stylistics’, ‘Emerging and future trends in stylistics’ の 4 部から成り、第 3 部には以下に掲げる 12 におよぶ部門が提示されて現代文体論の鳥瞰図を提示する。Geoff Hall, ‘Pedagogical stylistics’; Andrea

文体論の研究

Macrae, 'Stylistics, drama and performance'; Catherine Emmott, Marc Alexander & Agnes Marszalek, 'Schema theory in stylistics'; Ernestine Lahey, 'Stylistics and text world theory'; Barbara Dancygier, 'Stylistics and blending'; Margaret H. Freeman, 'Cognitive poetics'; Olivia Fialho & Sonia Zyngier, 'Quantitative methodological approaches to stylistics'; Rocio Montoro, 'Feminist stylistics'; Chantelle Warner, 'Literary pragmatics and stylistics'; Michaela Mahlberg, 'Corpus stylistics'; Jean Boase-Beier, 'Stylistics and translation'; Lesley Jeffries, 'Critical stylistics'.

本ハンドブックに収められている論文には認知言語学を枠組みとするものがいくつもみられるが、'Stylistics and blending' もそのひとつである。本論での対象は英戦争詩人 Wilfred Owen による 'The Parable of the Old Man and the Young'。この詩が Genesis 22 への allusion であることは、ストーリーおよび語彙の選択から明らかであるが、論者は 'Generic space' と 'Input' を経て、'Counterfactual space' [pride (Ram)-offering; nations of Europe (Abram's "seed")-protected] と 'Real story space' [soldiers (Isaac)-son-offering; nations of Europe (Abram's "seed")-lost] の統合に至ると結論づける。批評家の Jon Silkin は、'In Owen's parable, God's terrible aspect remains undeflected. He slaughters the young men and, perhaps, by implication, His own Son.' (*Wilfred Owen: The Poems* [1985]) と簡潔に述べているが、本論での考察は上述の 3 段階を踏んで初めて完結する。

文体論の将来に関しては、第 4 部の Jeremy Scott, 'Creative writing and stylistics' に注目したい。文体分析は product としてのテキストを対象とするが、従来の文体研究の知見を process として活用できる分野が (creative) writing といえよう。英語教育との関連においても今後の開発が期待できる。*Cambridge Handbook* も最後の Part V に 'Extensions of stylistics' を位置づけるが、David Peplow, 'The stylistics of everyday talk' は日常会話の style に目を向けて、頻出する oh の機能を考察する。日常会話のスタイル研究は、Ronald Carter の構想する 'spoken stylistics' ('Stylistics as applied linguistics' [*Cambridge*]) の一翼を担う重要な分野となろう。

ここで国内の研究論文に目を転じよう。文体研究の新しい分野として学習者用の graded readers (GR) があげられるが、魚住香子「"The Speckled Band" における語りと描写——Graded Readers との比較を通して」(『現代英語談話会論集』第 10 号) は、Holmes シリーズの "The Speckled Band" における人物描写、場面描写および語りを中心に、原作と 5 種類の GR を比較検討して、「原作における語りの力と場面描写の豊かさ」を確認する。堀田知子・稲木明子・沖田知子「メディアと情報操作」(『龍谷紀要』第 36 巻第 2 号) は、ロシアとアメリカの情勢に関する報道を *New York Times*, *Washington Post*, *USA Today* の 3 紙を比較して、メディアにおける情報操作を明確に分析した高論である。

回顧と展望

最後に小説、詩、演劇、その他の順に業績を列挙しておく。細川美苗「メアリ・シェリーの『最後のひとり』における両義性——語りの再構築と癒し」(松山大学『言語文化研究』第34巻第2号)、宮崎隆義「ハーディのユーモア——『惑える牧師』の言語表現(1)」(徳島大学『言語文化研究』第22号)、甲斐清高「ディケンズの機械のイメージ——『ハード・タイムズ』を中心に」(名古屋外国語大学外国語学部『紀要』第48号)、Hiroko Mizuta, “D. H. Lawrence and the Politics of the Symbol” (大阪大学大学院『待兼山論叢』第48号)、中尾真里「‘A Painful Case’の内面描写——チエーホフ『犬を連れて奥さん』との比較」(『奈良大学紀要』第43号)、豊田昌倫「Hercule Poirotの英語——“broken English”と“exact English”」(『現代英語談話会論集』)、ポール・ダグラス「醜怪なる母性——Ishiguroの*A Pale View of Hills*における『過去』の解明」(『名古屋学院大学論集 言語・文化編』Vol. 26, No. 1)、Yuko Yamamoto, “Mark Twain’s Eavesdropping on Suppressed Voices: Female Colloquialism, Vernacular, Profanity, Private Letters, and Diaries” (神戸女子大学英文学会 *Tabard*, 第30号)、倉林秀男「ヘミングウェイ作品における曖昧性について——“The Sea Change”と“Hills Like White Elephants”を中心に」(杏林大学『外国語学部紀要』第27号)、河田英介「両義性、変態可能性、一条の光:アーネスト・ヘミングウェイ『蝶々と戦車』における修辭の様式と隠喩のメカニズム」(千葉大学『人文研究』第44号)、岩本浩樹「『憂愁のオード』とキーツの“passiveness”——詩人と思案」(早稲田大学大学院『教育学研究科紀要』別冊第22号-1)、山田泰広「ホプキンスの詩における聖なるものへの呼びかけ」(南山大学『アカデミア 語学・文学編』97)、古庄信「シェイクスピアにおける修辭法の研究～*The Taming of the Shrew*における反復技法について」(学習院女子大学『紀要』第16号)、笠本晃代「*A Woman of No Importance*における親族名称の使用について」(*Kwasui English Studies*, No. 22)、増田光“The Brightness of White Light in Arthur Miller’s *The Crucible*” (東京純心女子大学『紀要』第19号)、高森理絵“Metaphorical Extension in Old English Poetic Words: With special Reference to *Wylm* and *Weallan*” (大阪大学言語文化学会『言語文化学』Vol. 24)、片見彰夫“Comparative Studies of the Shorter and Longer Versions of Julian of Norwich: With Special Reference to Repetition and Word Pairs” (青山学院大学英文学会『英文學思潮』Volume LXXXVII)、佐野隆弥「エリザベス朝散文とその後(2)——17世紀科学革命期を中心に」(筑波大学大学院『文藝言語研究 文藝編』67)、岩本和良“Interpersonal Function of Paraphoning in Obama’s Inaugural Address” (『外国語学部紀要』)。

(京都大学名誉教授)